

湖国の大空に飛翔！ 大凧に夢をのせて。

● 八日市大凧

国の無形民俗文化財「八日市大凧」は、江戸時代から300年の伝統を誇る郷土の文化遺産。凧を愛する市民の思いがひとつになって戦後に八日市大凧保存会が結成され、湖国の空に大凧が舞うようになりました。伝統文化の保存と研究、技術の伝承に取り組み保存会の活動拠点である八日市大凧会館を訪ねました。



八日市大凧会館に展示されている100畳敷大凧。竹の骨組みと美濃和紙で作られ、その大きさは縦13m、横12m、引き綱を付けたときの重さは約700kgになるという。図柄上部の飛び魚を「飛=非、魚=war(ウォー)=戦」、下部の「誓」の文字と組み合わせて「非戦の誓い」と読む。2005～07年に飛揚。

東

近江市にある「世界風博物館八日市大凧会館」のホールの吹き抜けに、仰ぎ見るほどの巨大な凧が展示されている。その大きさはなんと1000畳敷。毎年5月に開催される「八日市大凧まつり」では、100人以上の市民の手でこの凧が上空に揚げられるという。その光景を想像するだけでも胸が躍る。

八日市では、江戸時代の中頃から、男子の出生を祝って5月に凧を揚げる風習があり、その後、国や地方の慶祝行事があるたびに村を挙げて凧が揚げられてきた。「八日市には沖野ヶ原という広大な野原があり、琵琶湖特有の絶好の凧が吹いています。この風土が凧揚げに適していたのでしょう。さらに近江人気質の負けん気の強さが村々を競争に駆り立

て、凧も次第に大きくなっていきました」と、八日市大凧会館の学芸員、鳥居勝久さんは話す。

しかし、昭和に入ってから凧揚げの風習は廃れ、戦中戦後に大凧が揚げられることはなかった。地域の誇りである伝統文化を守るために有志が集まり、昭和28年には八日市大凧保存会が結成された。「いいものだから残っていくわけではない。いいものだからこそ残していかなければならない。これは初代会長・西澤久治さんの言葉で、これまで村の対抗意識から秘密にされてきた技術をひとつにまとめ、戦後はじめて80畳敷の大凧を揚げることに成功したのです」と現会長の山田敏一さん。

昭和53年からは新成人を祝う20畳敷の大凧が毎年揚げられるようになった。実は会長の山田さんもこのときの凧作りがきっかけで保存会に

凧揚げの伝統が復活！ 「八日市大凧まつり」で 1000畳敷の凧が舞う。

入ったのだという。「みんなで話を重ねながら共同製作する過程が楽しく、それが実際に完成して大凧がふわっと空に揚がった時の感動が忘れられなくて…」

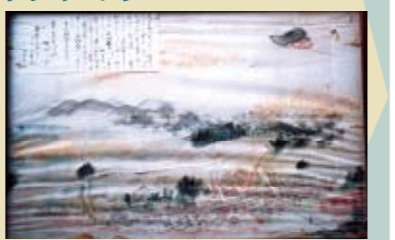
昭和59年、旧八日市市の市制30周年を祝して戦後最大の220畳敷大凧を揚げたことを機に、翌年から毎年「八日市大凧まつり」を開催。大凧の一大イベントとして、名物の100畳敷大凧が揚げられるようになった。昨年は3年ぶりに凧が新調され、東近江市となつてからはじめて作られた凧となる。今回から旧八日市以外の市民も製作に関わるようになり、地域の盛り上がりはますます高まっているようだ。



昨年、3年ぶりに新調された100畳敷大凧。約1ヵ月かけて、延べ601人が製作に関わった。今回は「いのち」をテーマに絵柄は一般公募され、判じもんは「共生～つながりたくましく生きる喜び～」に決定(写真右)。向かい合う2羽のタカの絵と、上から「喜」、「生」という字を書き「喜(き)、鷹(よう)、生(せい)」=「共生」と読む。

● 八日市大凧の記録 最大は240畳、最長は2時間5分！

これまで揚げられた凧の中で、記録に残る最大のものは1882年(明治15年)の「四海兄弟」で大きさは240畳。1984年(昭和59年)、旧八日市市市制30周年を記念した第1回「八日市大凧まつり」で揚げられた220畳の大凧は戦後最大のものとなる。最長の飛揚時間は、1993年(平成5年)の「八日市大凧まつり」で揚げられた100畳の2時間5分。この年の11月に「近江八日市の大凧揚げ習俗」が国の無形民俗文化財に選択された。



240畳の大凧「四海兄弟」の飛揚を描いた絵(中野神社所有)



条件のいい風を待ち、合図とともに市民が引き綱を引っ張って走り出す。風を受けた大凧が宙に舞い上がると、会場から拍手と歓声が…(2005年の「八日市大凧まつり」より)。



八日市大凧保存会会長・山田敏一さん(左)と世界風博物館八日市大凧会館学芸員・鳥居勝久さん(右)。



今年の成人式で揚げられた20畳敷大凧。成人式実行委員会が中心となって製作され、式典の当日は、新成人に保存会と市民が加わって揚げられた。判じもんは干支にちなんだユニークなもの。

次代の担い手たちに 凧作りや飛揚の技術を 伝承していくために。

埼

玉泉春日部市や神奈川相模原市、座間市にも有名な大凧はあるが、八日市大凧を際立たせる大きな特色のひとつが、凧に描かれる「判じもん」にある。絵柄と文字を組み合わせ、語呂合わせで意味を持たせるユニークなデザインで、他の地方の大凧と比べて製作に手間がかかっていることが

よくわかる。

さらに図柄に沿って切り抜きを施し、凧を揚げるときの風の抵抗を少なくする工夫も凝らされている。「切り抜きは左右対称になっていて、風が分散することで揚げ網の強度と凧の大きさのバランスをとることができると。先人たちの知恵には本当に驚かされます」と会長の山田さん。

また、この巨大な凧を収納、運搬するため

に長巻き工法と呼ばれる技術が江戸時代から伝えられている。凧は縦に取り付けられた5列の丸竹を取り外すことで、コンパクトに巻き込めることができる。「この工法のおかげで大凧を海外にも運ぶことができますし、近年ではフランスやマレーシアでの凧揚げ大会に参加しました。これは他の地方の大凧ではできないことで、凧の文化を通じて国際交流にも「役買っています」と鳥居さんは話す。

大凧の保存と伝承に努める保存会にとつて、これからの大きな課題は後継者の育成である。これまでも小学校や子ども会で大凧作りや飛揚の指導を行っているが、昨年9月には



八日市の大凧は海外の空でも揚げられている。伝統的な長巻き工法が国際交流を可能にしている(写真は1998年フランス・ディエップ市の「国際凧揚げまつり」より)。



「チャレンジ大凧2020」で、8畳敷(約4m四方)のミニ八日市大凧の製作に取り組む子どもたち(八日市大凧会館別館にて)。デザインは今年開催される「スポレク滋賀2008」に向けて、キャラクターをPRするものに。スポレクのプレイバントなどで揚げられる予定だ。

「市内の小学5、6年生を主体に、凧作りを通して、先人から伝えられてきた八日市大凧の製作、飛揚に関するすべての技術を伝授し、普及していきたいと思っています。子どもの頃から凧に関心を持ってもらい、少しずつ

創意と工夫がきらり



①長巻き工法
大凧の縦骨を取り外して下から巻き込めることができる工法で、凧の運搬や収納を可能にしています。江戸時代の天保年間に発明された製作技術のひとつ。

②切り抜き工法
図柄にそって左右対称に切り抜く工法で、凧を揚げやすくするために風の力を分散させます。これは全国に類をみない技術で、江戸時代の弘化年間に発明されました。

底辺を広げていけたら…。いま、その一歩を踏み出したばかりです」と山田さん。
最終的な目標は世界無形文化遺産への登録だという。無限大の空に大凧の夢が大きく飛翔しようとしている。



「凧揚げができるというのは平和のあかし。戦争が起こっているところでは無理ですね。私たちは世界中に凧揚げができる環境を増やしていきたい。そういう時代に向かっていってほしいなと思っています」と目を輝かせる保存会会長の山田敏一さん。

選びてメッセージ発信!

大凧の「判じもん」を読む

八日市大凧の特色のひとつは凧に描かれる「判じもん」。凧の上部に鳥や魚などの動物の図柄を描き、下部に書かれた朱色の大きな文字と組み合わせ、語呂合わせで意味を持たせます。八日市大凧まつりで揚げられる100畳敷大凧には、その時代の世相を反映したものやメッセージが込められています。ここに歴代の100畳敷大凧の判じもんを紹介しましょう。皆さんは読み解けるかな?

幸



大凧と緑のまち八日市 (1991、1992、1993年飛揚)

上部に3羽の鳥で「緑(三鳥)」、中央に旧八日市市の市章をあしらひ、下部の「幸」の大文字の上に「多」の文字を組み合わせ「大多幸(おおたこう)=大凧」。「大凧と緑のまち八日市」と読みます。

輝



一人ひとりが輝くとき (2002、2003、2004年飛揚)

2羽の尾長鳥が左右対称に描かれ、下部に「輝」の文字で「一人(ひとつの鳥)ひとり(ひとつの鳥)が輝くとき」と読ませます。「人権」をテーマに図柄を募集し、それをもとに製作されました。

発



写真提供/びわこビジターズビューロー

町の発展を振り返ろう (1994、1995年飛揚)

中央に旧八日市市の市章、下部に「発」の文字、その文字の中に黒い点をつけて「発展(点)」、上部には左右に尾を振っているエビを描き「海老=かいらう」となり、あわせて「町の発展を振り返ろう」と読みます。

碧



碧い地球を大切に (1999、2000、2001年飛揚)

2匹の鯛が接して「鯛接(たいせつ)=大切」、背景に地球をあしらひ「碧」の大きな文字で、「碧い地球を大切に」と読ませます。「環境」をテーマに世界に向けて発信したメッセージです。

元



元気なまち八日市 (1996、1997、1998年飛揚)

上部に2匹の亀、中央に旧八日市市の市章、そして下部に「元」の文字が書かれて、「元」と亀を組み合わせ「元(文字)気(亀)」となり、「元気なまち八日市」と読ませます。

DATA

世界凧博物館 八日市大凧会館

東近江市八日市東本町3-5 ☎0748-23-0081

開館時間/9:00~17:00(入館は16:30まで)
休館日/毎週水曜日、祝日の翌日、毎月第4火曜日、年末年始
入館料/大人200円、小・中学生100円

八日市大凧を展示する施設として1991年にオープン。大凧の雄大なイメージに合わせて、会館の屋根は大きな片勾配がつけられている。館内の吹き抜けのホールには、八日市大凧まつりで揚げられる100畳敷大凧や成人式にあげられる20畳敷大凧のミニチュアが展示されているほか、歴代の大凧を縮小復元した色彩豊かな図柄の凧も楽しめる。映像室では毎年5月に開催される八日市大凧まつりの様子を大画面で見ることが出来る。また、2階には日本各地の凧や世界の凧が2千点以上も収集展示されている。



5/25(日) 八日市大凧まつり

東近江市愛知川河川敷 AM9:20~
※雨天の場合は6月1日に順延

100畳敷大凧の飛揚で知られる「八日市大凧まつり」は毎年5月の最終日曜日、愛知川河川敷で行われる。約40チームが集結して図柄や揚げ方を競うミニ八日市大凧コンテスト、全国各地から集まった愛好家による郷土色豊かな凧の競演も楽しみ。会場では、オープニングの20畳敷の大凧揚げ、写真コンクール、ステージショーの他に、各種バザー、地元物産の販売などのイベントも開催される。まつり当日は東近江市役所臨時駐車場、近江鉄道八日市駅から無料シャトルバスが運行予定。

お問い合わせ●八日市大凧まつり実行委員会事務局 ☎0748-24-1234

【お詫び】4月号「源氏物語千年紀」特集に掲載した社団法人石山観光協会の電話番号に誤りがありました。正しいお問い合わせ先は☎077-537-1105です。皆さまにご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。